

甚だしいのは無分別にも國定教科書の中に劔を揮い人を斬の圖を處々に入るゝ事である。之れを編纂した者の心事は知らないが、之れを認て國民教育に必要なりとする文部省の無知と無責任には驚かざるを得ない。小中學校の教員達も之れを以て同く普通の事であり、國民たる者の心得置かざるべからざる事柄であると眞面目に考えて居るものか。斯う云ふ事が改められもせず、怪まれもしないは極めて不思議な事である。之れでは國民精神の向上はおろか、愈々逆戻するのも當然であらう。

世には風教の廢れ行くを慨する者もあるが、今の教育なるものは之れを自然に放任して置くよりは却つて遙に善くない影響を子弟に與えつゝあるに氣附かないのか。日々に子弟の良心を傷賊しつゝ、而して文化とか平和とか言ふのは矛盾も甚しい事である。

### 良寛和尚

越後の良寛は非常な人傑である。其和歌數首を茲に摘録する。

いかにして眞の道にかなは、やひとへに願ふ寢てもさめても

いかにして眞の道にかなひなむちとせのうちにひと日なりとも

身を捨て世を救ふ人もますものを草の庵に暇もとむとは

なに故に家を出しと折ふしは心にはぢよすみそめの袖

山陰の岩間をつたう苦水のかすかにわれはすみわたるかも

み草かり庵むすばむ久方のあまの河原のはしの東に

飯やこはむたき木やこらむ菜やつまむ秋のしぐれのふらぬその間に

歌やよまむ手まりやつかむぬにやでむ心ひとつをさだめかねつも

ゆくりなくわれ來にけらし春のぬの若菜つみつゝきみがいへるに

子供らと手まりつきつゝこの里に遊ぶ春日はくれすともよし

ますらをのふみけむよゝのふる道はあれにけるかもゆく人なしに

## 詩人タゴール

此前印度の詩人タゴールが來ると云ふ記事を新聞で見た時、誰が來遊を勧めたものか、それとも誰も勧めもしないのに自分で其氣に成つたものか知らないが、やめて呉れ、ばよいにと思つた。それは來て見れば必ず失望するに極つてゐるからである。

元來日本人は朝鮮人に對しても、支那人に對しても、或は何處の者に對してもさうであるかも知れないが、何故か能く來遊を勧める癖がある。それはどう云ふ積りであるか甚だ解し難い、恐らくは只輕いお愛相であらう。

一たい態々人を誘ふて何を見て貰ひたいと思ふのか。寧ろ來て見られては耻かしいと何故思はないのか。之はどうも不思議でならない。併しながら一つには何處の者にも在る自國自慢の己惚からでもあらう。

さてタ翁が愈々東京へ來られると、政治家、實業家其他詩人には縁も無ささうな人々が澤山集まつて歓迎會の催しがあつた。それは多少滑稽のやうでもあつたが敢て差

し支へない事だらう。會に臨んでタ翁は論文の朗讀を試みられた。其後帝大で一度、慶應で一度、英語の論文を朗讀されたのである。すると忽ち種々なる雜誌に大家小家の批評が出た。其れは何れも申合せたやうに大抵は理解も同情も欠けてゐるものやうであつた。

私は慶應の講堂で開かれたタ翁の講演を聴きに行つた歸りに、我國の基督者として一流の名聲ある某と、今一人の教育家と電車で一緒に乗り合つた。其人達も矢張り慶應へ行つた歸途である。車中某がタ翁を評して

『あの風采はまるでジュウだね』  
と言つた。すると教育家は之に應じて

『朗讀の調子が御經を讀むやうで何分聴き取りにくかつた、あれは亡國の調と云ふものであらう』

と言つてゐた。私は傍で此愛國詩人に對する基督教徒の情けない冷評を聴くに忍びなかつた。

其れからタ翁は東京を去つて暫く閑静な處に滞在してゐたが秋の頃亞米利加へ向つて立つて行つた。タ翁は折角楽しんでゐた日本へ來ても、講演をすれば其反響は總て冷評であり、會心の友は別に見出す機會もなく、日本は随分頼もしくもない、寂しい處だと感じたであらう。

私はタ翁の著述が色々翻譯されて出た頃、所謂猫も酌子もタゴールの物を讀んでゐる時には態とタ翁のものを一切見なかつた。流行は無論一時的で何時の間にか世人は全然タ翁の名さへ忘れたやうになつた。それで或日圖書館へ出懸けてギタンジャリを讀んだ。而してそれは如何にも氣持の善い、貴い書物だと思つた。イエーツが其序文に書いてゐるやうに私もケンピスの不朽の名著と殆んど匹敵するものだと感じた。

タ翁は英國政府が印度人教育のために各所に經營してゐる大小の學校は校舍や設備の點に於て整然たるに似ず、其實際の内容は頗る貧弱なものであり、決して能く人の教育を爲し得べきものでないことを痛歎してゐるのである。それで自ら資を投じて學校を建て、同胞子弟の教育に力を盡してゐると云ふことである。

タ翁は自分が生きてゐる間は英國政府と雖も其學校に對してどうする事も出來ないだらうが、自分が死んだ後は逆も依持して行く事が困難になるだらう、因つて今の中に其基礎を拵へて置きたいと云ふ希望を以て其後又亞米利加へ行き、好まぬ講演をも各處でされたと云ふことである。

## 尙 武

尙武の氣を養はなければ民俗が懦弱に流れるだらうと恐るゝは大なる誤りである。それは血氣の暴勇に驕り、殺を嗜むの蠻風をさへ醸成するものである。

國を護るに血氣の暴勇は無用である。武を用ゆるを好むは國を亡ぼす所以である。般鑑必しも遠く求むるに及ばないであらう。

## 朝 鮮

日韓併合斷行の時、其れが併合であらうが、併吞でなからうが、一視同仁と云はふ

が、善政を布くと云はふが、今後は表面静穏であらうが、無事であらうが、必ず鮮人の子々孫々に至るまで夢寐にも忘るゝ能はざる怨を我れに對して懐かしむるに相違ない。而して其れは威壓懐柔如何なる手段方法を以てするも到底消散せしむることが出来るものでないのみならず、彼等の不平不満は愈々鬱結して將來絶えず陰謀と爆發と繰り返へさるゝであらうと思つた。ところが果して其の通りである。生憎の事實である。

### 無 信 仰

智識階級に屬する人々の多くは無信仰ではないか。之は必しも日本のみの事ではない。東洋ばかりの事ではない。今や歐米を通じて皆然りである。彼等は無信を耻とせざるのみならず、却つて無信を以て窃に知者の誇としてゐるのではないか。偶々之れあるが如きも大抵僞信、迷信、徒信の類ではないか。

時は移る、世は變る、天下無信に化し了れば何の善い事が世界に在り得やうぞ。人

間の有らゆる努力は悉く無効に了り、總ての企圖は徒に慘歎たる自滅を招くに過ぎないことを、其時に及んで初めて悟らざるを得ないのである。

### 大聲は里耳に入らず

『大聲は里耳に入らず』と云ふ。けれども極めて卑近なる小聲でさへ眞實の聲は何人にも喜ばれない。今や俗世に附和するの俗聲でなければ世に能く聽く者はないやうである。故に此世に屬すべきでない者の言が世人に聽かれないのは亦當然である、而して人の道を學んで正直に之を履行しやうとする者は即ち此世に屬すべきではない。さらば今の世に於ては容れられないのが士人の正に受くべき當然の境遇である。若し道を説いて窮迫を感じない者が在るならば其れは必ず不純な道であらう。而して其人は眞に永遠の道に誠忠なる者でないに相違ない。

### 國家の名に由つて爲される事

凡そ國家の名に由つて決行される事で非常なる惡事もあれば甚だしい愚なる事もあ  
る。而して其れは實際何人の意志に基づくものか一寸捕捉し難いものである。其れは  
天子の意志でない事は無論であり、亦國民多數の與り知るところでなく、識者の固よ  
り非とする事である、けれども其は堂々として正義人道を振りかざすのが普通で、而  
して國家の名を以て推し進められる。だから何人も之に反抗する事は出來ないのであ  
る。許されないのである。

だが其れが馬鹿々々しい固陋な、驕慢な、俗惡な人の心から出てゐる事だけは確實  
である。而して其れは權力を使用し得る階級に屬する極めて少數者である事も自明の  
理である。

### 終にどうなる

労働問題、農村問題、水平運動、國粹會、勞資協調、過激思想取締、赤化防止、曰  
く何、曰く何、斯うして總ての問題は厭でも應でも日に月に根本的へと推し移つて行

く。而して終にどうなる。

### 天下又大いに亂れん

四年に互る慘歎たる大戦亂を以て世界は果して何ものを購ひ得たのか。人類は更に  
覺醒の兆を見ざるのみならず、却つて増々險惡の度を加ふるばかりでないか。平和と  
云ひ、親善と云ふも唯之れ外交的辭令に過ぎないではないか。

併しながら之は寧ろ當然の結果である。惡は惡を生む。殺戮は永久善果をもたらす  
ものではない。

### 現代人

理想を以て空想となし、夢となし、唯本能に委するを以て偽りなき正しい生活と思  
惟する者が今の世に少くない。

亦神を以て人の思想の所産となし、自己の頭腦を以て理解の及ばないところは凡て虚

妄となし、迷信とする者が甚だ多い。

而して文化と云ひ、藝術と云ふ。それは餘りに淺薄でないか。卑俗でないか。根もなくして憐れむべき者とも知らないのではないか。

### 天下の兄弟に問ふ

人類が有らゆる能力を傾倒し、世界を擧て四年に互る慘歎たる大殺戮を恣にしたのは遂先達つての事ではないか。それは吾等の記憶に猶新たなる筈ではないか。それも既に半ば忘れたのであるか。

あれ程の大犠牲を拂つて吾等は畢竟何を得たのであるか。何を學んだのであるか。全く何にもならなかつたのか。世界は大亂前に比して多少なりとも善く成つたのであるか。却つて日に險惡に化しつゝあるでないか。何時又同じやうな事が繰り返へさるか解らないではないか。其れは賢い事であるのか。馬鹿げた事ではないのか。吾等はそんな事をしてゐて善いのか。戦争の準備を整へる他に爲す事は無いのであるか。

子孫に對しても其れで濟むものと思ふてゐるのか。それは人類全體の大耻辱ではないか。吾等は之を深く思はんともしないで、唯日常の出來事に追はれてゐて、それで善いのであるか。

吾等は『一つの石も崩されずしては残るまじ』と云ふ言を思ひ出して悚然たらざるを得ない。

### 己を以て正しと爲す

事あれば乃ち責を他國に課し、他を以て誠意なしと斷ずるは外交家の常套である。而して何れも自己に誠意の缺くるものありとは曾て思はないのである。己は常に正しくして不正なるは必ず彼れにありとする。之れ吾等の常習である。

### 外 交

今人は唯押し強いのを以て外交の能事とでも心得てゐるものか。而して自分の思

ふやうに成らない時は何時も相手に誠意が無いと云ふことを繰り返す。

凡そ誠意ある者は必ず他に對して敬意を失はない。故に必ず偏狹でない。必ず寛容である。他を責むるよりも先づ自ら反省するものである。而して己が誠意の足りないことを耻とするも、決して他を責むるを好むものではない。他に對して誠意の有無を云々する者は己が既に之を缺く故である。

猜疑の念も挟まず、喧嘩腰にもならず、己の慾も主張しなければ天下の事は大抵談笑の間に解決が出来やう。大慾は無慾に似たりと云ふ語を思ふ。

### 雜魚と鯨

先年或機會に於て私は富豪と官吏が相結托して不當の利益を得やうと如何に用心深く陰險に畫策するかを實際に見たことがある。だが斯う云ふ事は恐らく當世の富豪が慣用手段とするところであらう。官吏の中にも巧みに私腹を肥やさうとする者が絶えない筈である。雜魚の類は何時でも網にかゝるが鮫や鯨は容易に捕へられるものではない。

ない。

### 政府の專賣事業

政府の專賣事業は國民の便益を計るためではなく、政府の利益を目的とするものならば、即ち良質の物を製造して、之を安價に供給しやうとするのは反對に、粗惡な物を造つて高價に賣り付け、而して出来るだけの獨占的利益を擧げやうとするならば之は政府自ら明に暴利の手法を天下に示すものである。

斯う云ふ事は國民の精神に至大の惡影響を及ぼすものであるのに、爲政家は何故之を不問に附するのか。

### 良心

自ら省て疾しい事はないとか、天地に對して愧るところはないと豪語する者がよく在る。併し其れは何の權威も無い言である。と云ふのは第一にさう云ふ言が果して其

人の良心から出るのか否か其れが甚だ怪いものである。

同じ良心と云つても或人の良心は能く其心全體を支配してゐるかも知れない、だが或人の良心は其の一隅に壓迫されて氣息喘々たるかも知れないのである。良心の司令に服従するを好まない我儘なる我其者は常に人心を支配しやうとするものである。否大抵我が支配權を掌握して良心を幽閉してゐるのである。或は其良心が夙に身外に退去してゐるのも知らない者がある。此類は却つて世間無數に跋扈してゐる。而して憶面もなく常に豪語するのは大抵此種に屬する者である。

### 人心惡化の一因

人心が之程までに日に日に險惡化し行くは、遠近大小、種々なる原因が無くてはならぬ。だが方針を誤りたる國民教育も確に其主なる一つに相違ない。

今の教育は、人の子弟をして先づ第一に、其私心を去らしめんとは努めないで、寧ろ常に之を増長せしめんと導きつゝあるやうに見ゆる。之は即ち萬惡の根元を培養する事ではないか。

る事ではないか。

戦争に對する誤りたる見解の如きは、其一例である。之を以て今猶男子の壯快事の如くに取扱つてゐるのは、否むべからざる普通の事實であらう。而して時に他の口吻を學んで、或は人道と云ひ、或は心にも無い世界の平和を云々するなどは、餘りに滑稽なる欺瞞でないか。

斯う云ふ風に、其根本に於て大なる誤謬あるを知らないで、之を組織的に全國の子弟に強ゆるのであるから、唯此一事を以てしても、世道人心を破壊し去るに足るものがあらう。

### 超然たる態度

吾等の心は兎角散漫に流れ易い、甚だ集中の力に乏しいものである。故に平常でも衆人群居の場所へは成るべく辭して近づかないを善しとする。況んや非常の事變に遭遇し、世上騒然たる時などは特に能く意を用ひ、身に於ても心に於ても努めて超然た



る態度を執らなければならぬ。さう云ふ場合に浮か／＼すると、何時の間にか靈に於ける神よりの賜、即ち全地の財寶を以つてしても替へ難い貴き生命を悉く奪ひ去られる虞れがある。而して其れは不幸にして永久に復た取り戻す事が不可能になるかも知れないのである。私は此事を昨年震災に際してしみ／＼實驗したのである。

### 眞に自由なる人、餘裕ある人

ケーベル先生は斯う言つて居られる、

『多年私の抱ける、しかも未だに遂げざる願望の一つは、生涯のうちに一人の眞に自由なる人に會ふといふことであつた、——基督教的若しくはレツシングの意味に於て自由なる、即ちアツシジのフランシスカ又はアルハーファイ（レツシングの傑作賢者ナータン中の人物）の如き人に。これ恐らくは私が生前になほ見たいと思ふ唯一の新しいものであらう。否、かくの如き人が現代にも何處かに住んで居るといふことが單に確かめられただけでも、それは既に私を福にし且つ慰めるであらう。現

實の人生に於てかういふ人を見出すといふ希望に至つては、今や私はこれを抛棄した、而して此種類中の第二流若しくは第三流の人物をでも見出すことが出来れば、もうそれで私は幸福であらう。——完全なる自由は實際の歴史に於てはただ二回出現しただけである、即ち基督（人と見て）とアツシジのフランシスカに於て（こゝに佛陀を擧げなかつた譯について、ケーベル先生は譯者に次の如く語られた。

「自分はこゝに恐らく佛陀をも擧ぐべきであらうが、自分はそれを欲しない。何故かと言ふに、佛陀について充分明瞭な觀念を有たず又彼とは餘りに縁遠い自分が彼を擧ぐるも、それは單に空言に過ぎないからである」と）完全なる自由に近いと言へるのは、ソクラテス、シノーベのデイオゲネス、エピクテトス、エピクロス、デカルト、スピノーザ及びカントである。——シヨーペンハウアは正しく理解される、場合には他を自由にする力を持つてゐる、けれども彼其人はさうでなかつた。然らば如何なる人が自由であるか。自由なる人とは、世の中に又人々のために生きてはゐるが、世と人どから何物をも要求せざる——しかも世界の善なる且つ美なる方面

を蔑視することなき——人を謂ふのである。禁慾主義者や清教徒等の自由ならざるは、此世の子等の自由ならざると一般である』(ケーベル博士 續小品集 久保勉 氏譯 三二—三三)

勝海舟先生の談に

『人には餘裕といふものが無くては、とても大事は出来ないよ。昔から兎も角も一方の大將とか、一番槍の功名者とかいふ者は例令ごんな風に見えても、その裏の方から覗いて見ると、ちやんと分相應に餘裕を構へてゐた者だよ。今の人達にこの餘裕を持つてゐるものが何處にあるか。人には随分澤山あるやうに見えるだらうけれども、おれには頓と見えないよ。皆無だよ。それを思ふと西郷が忍ばれるのさ。彼れは常に「人間一人前の仕事といふものは高が知れとる」と言つてゐたよ。

どうだ餘裕といふものは此處だよ。幾ら蚤捕眼で天下の大機を見たとして観えるものではないよ。幾ら物事に齷齪して働いても仕事の成就するものではないよ。功名を爲さうといふ者にはとても功名は出来ない。屹度戦に勝たうと云ふ者には中々勝戦

は出来ない。これ等はずまり無理があるからいけないのだ。詮じつめれば餘裕が無いからの事さ。

君等には見えないか。大きな體をして小さい事に心配し、あげくの果に煩悶して居るものが世の中に随分多いではないか。黙目だよ、彼等にはとても天下の大事は出来ない。つまり物事を餘り大きく見るからいけないのだ。物事を自分の思慮の裡に疊み込む事が出来ないから、あの通り心配した果てが煩悶となつて壽命も何も縮めてしまふのだ。全體自分が物事を呑み込まなければならぬのに、却つて物事の方から呑まれてしまふから仕方がない。これも矢張り餘裕がないからの事だ。

何事をするにも無我の境に入らなければいけないよ。悟道徹底の極は唯無我の二字に外ならずさ。幾ら禪で煉り上げてもなか／＼さうは行かないよ。いざといふと大抵の者が紊れて仕舞ふものだよ。

餘裕、思慮、膽力など、いつても、これは其人の天分だよ。天分といふものは争はないものだ。云々(氷川清話八〇、八一、八二、)

私は折にふれては此等の談を思ひ出す。而してつくづく自分の至らないのを歎じ前途の猶遠なるを覺ゆる。且亦實際『數多き人の中にも人ぞ無し』と云ふ感を深ふする。

今や學識才能餘りある者は世に甚だ乏しくないが、唯惜い事には奮然私慾私心の繫縛を破つて、至順の大節を堅持しやうと志す者が實に尠い。故に折角計營盡瘁する總ての事も勢規模が狭小とならざるを得ない。而して寸前暗黒、末の末にばかり拘泥して、日を送り年を送るのは實に勞して得るところ無いのみではない、天下の福事を破壊しつゝ、自他共に不幸悲慘の淵に向つて急ぎながら其れを覺らないのは即ち此世の常狀である。

## 友

人の蒙を啓ひて呉れやうとする者、人の不善を改めしめやうとする者、人のために

眞の幸福を希望して呉れる者、人のために勞を厭はず、自ら損して惜しまざる者、之が即ち誠の友である。彼はあくまで人のために忠實である。だから自ら求むるところは更に無い。人の過は限りなく赦す。而して終りまで忍堪する。人を捨てること云ふ事はしない。

今の世に斯の如き友を持つ者程幸福なる者はない。翻つて思ふ、誠に人の益友たるの徳を修むるは容易な事ではない。

## 味 無 き 鹽

私は何時神を愛慕するの心を失なつて了つたのか。

どうして奉事の志操を無くして了つたのか。

平生、日將に暮れんとするに道猶甚だ遠い恨を懷きつゝ、日夜奮勵して深く學ばなければならぬと心懸けて居たのに、何時どうして憤拔自彊の精神を無くして了つたのか。而して今の世の有様を以て無智と罪惡と不幸悲慘の充滿する暗黒世界と痛感せ

ないやうに成つたのか。従つて爲さなければならぬ大事も無く、希望の屬すべきものもなく、悦樂の感なく、感謝の念なく、弛緩したる者に成つたのである。

之は天命を失なつた者である。所謂味を失なつた鹽である。世に無用無益の殘骸である。多年の苦學も斯うなつては全く跡形無いものと云ふべきである。五十歳を越へても猶不圖一朝にして斯う云ふ事に成らうとは實に危険千萬なる世の中である。

之は恢復し得らるゝであらうか。否、私は何んとしても靈に於て失なつたものを取り戻さなければならぬ。

けれども之は何程あせつて見ても、もがいて見ても、慾を以て取り返す事は出来るものではない、初めから慾を以て得たものでないから。大道至嚴。先づ己の心を虚ふして眞に嬰兒の如くならなければならぬのである。左もない限り、永久に、微信だも人の心に興るものではない。

唯恭謙なる者のみ獨り能く天命を受くる。大人は一面に於て嬰兒の如き者である。

## 隱 居

私の近所に能く幾人かの人達が集まつては、おうやうに謠を歌ふ聲に和して長閑なる鼓の音を聞くことがある。其家の門外に農夫が世話しさうに労働してゐるのと對照して如何にも呑氣な御隠居達のやうに思はれる。

恩給は貰はれる、衣食の苦勞は無い、血氣は衰へる、若い時のやうな衝動は無い、張合も無ければ退屈せざるを得ない。そこで未だ毫碌もしないのに謠曲だの圍碁だのと隠居翁の如くにして暮す者が世間甚だ少くないのである。

人に一片の信あれば必ずさう成るものではないと思ふ。眞に微信だに在れば人は神と兄弟とに對して必ず大なる責任を感ぜざるを得ない、而して自ら反省するの勇氣も出る筈である。従つて爲すべき事は負擔に堪へない程あり、内外の戦は間斷な、ある筈である。何の暇あつて苟も徒然消閑に苦しまうぞ。徒に死を待つやうな生活は既に生活とは言はれない。何の價値も無い少しも貴くない暮し方と言はねばならぬ。自分

では得意であつても其れは憐ねむべき者である。

### 新井奥濠先生

明治三十二年の夏の事である、私は巢鴨の明治女學校に校長巖本善治氏を訪ふたところ、氏は私に

『新井に會つて行き給へ、長年亞米利加に居た人で、非常に氣持の良い人だ』  
と言つて名刺に紹介の一言を書いて呉れた。私はどんな人だか兎に角會つて見やうと思つて、早速教へられた通りに瀧野川の楓寺へ尋ねて行つた。而して本堂の裏の竹藪の中に在る茶室で初めて其人に會つて見ると、意外にも想像とは全く違つた老人であつた。實は巖本氏から長く亞米利加に居て近頃歸つた人だと聞いたので、多分ハイカラ風な紳士かと思つてゐたのである。ところが洋服こそ着てゐても始終膝を崩さないで端坐して、而して談話の調子も至つて静で、少しも輕薄な浮いな様子がない。更に辨を好むと云ふ風もなくて問はざれば答へすと云つたやうな態度であるから、私には

全く何だか解らなかつた。やがて半紙二三枚に細字で書いた物を出して見せられた。其れはどんな事を書いてあつたか今覺へてゐない。だが私は一讀して、此人は一種の基督教徒であると云ふ事だけは直ぐ合點した。それで

『同志の人が在りますか』

と訊いたら、

『一人も在りません』

と言はれた。此處は晝でも薄暗い竹藪の中だから、切りに藪蚊が出て來て着物の上から私の膝のあたりを刺す。私は

『随分蚊が居りますね』

と言つたら、老人は平然として静な口調で、

『蚊帳が無いので夜になると特に困ります』

と言はれた。餘程堪え難い事であつたに相違ない。

一人の青年が。小さな机を並べて坐つてゐた。食事は近所から辨當を運ばせて濟し

て居られた。

如何にも黙然として居られるので私は何を訊いてよいのか、何を談してよいのか解らず、格別面白いとも何とも思はないで其日は辭して歸つた。

思ひ懸けない不圖した事が、人の一生涯にどんな重大な影響を及ぼすに至るか、全く解らないものである。私は初めて新井先生を見た時、否其れから四五年の後に至るまで幾度となく相見てゐながら、實に愚かにも、亦固くなにも、此人が非常なる天命を蒙られる、非凡な人であると云ふことを夢にも知ることが出来なかつた。況んや將來此人を師父と尊崇して、長く教を受けることにならうとは、全く豫想しなかつた事である。

其後新井先生は同じ瀧野川村の或寺の一室を借りて青年と共に移られた。其處へも私は二三度訪問した。其處は北向きの陰氣な座敷であつた。暫くして其青年は國許へ歸つて了つた。それから先生は唯一人其近所の農家の一室を借りて、其處で自炊をして居られた。或朝私が尋ねて行つたら

『是れから外出しますから一緒に出懸けませう』

と言はれる、私は

『朝御飯はもうお済みですか』

と訊いたら

『一寸失禮して是れから喰べます、だが朝飯と言つても斯んな物です』

と言ひながら傍にある小さな、きたない火鉢にかけて在つた土鍋の蓋を取つて見せられた。見ると水の中に里芋が二つ三つ這入つてゐるばかりであつた。私は何んと云ふ簡単な食物であるかと思つた。其頃は先生も全く手も足も出されず、尋常の者の忍ぶ能はざる窮境に居られたのである、だが其農家には幾日も居られなかつた。直に巢鴨の通りの三軒家と云ふ處へ移られた。今度は五六人の書生と一緒に住んで居られた。其處へは私は唯一度行つたばかりであつた。二階建ての長屋で、先生は二階に居られた。

『此處は協和政治にしてゐます』

『隣り（壁一重である）の人が子供を叱る聲が八ヶ間しくて困ります』

と言つて居られた。其時も簡單で而も極めて要領を得たる一文を見せられた。

其處にも落ち着かれないで又移られた。後に其頃の談が出た時、先生は

『家賃も拂へなくなつて解散したのです』

と言はれた。其當時は巖本氏が世話ぶりをして居たから、其等の書生も多分皆巖本氏の紹介であつたらう。

それから巢鴨庚申塚の附近に狭い二軒長屋の一方を借りて、二人の少年を預つて炊事の世話までして居られたのである。私は其處に二三度訪問した。一度は可なり神秘的な談を聽いて、之は如何にも宗教的造稽の深い人だと窃に驚いた。一度は田中正造氏が「論語」を開いて何か質問して居るところであつた。木公氏が初めて先生に會つたのは此處に居られた時である。

それから間もなく私は朝鮮へ行く事になつた。歸つて來た時は又移つて小石川の大塚に居られた。其家は門構への立派なもので、庭も廣く、部屋も五つ六つあつた。相

變らず幾人かの書生が同居してゐた。後には追々人數がふえて、向ひ側の家に間借りをする者がある程になつた。

其頃に横濱の平沼延次郎氏から何か先生のために出来る事があればお手傳ひをしたいと云ふ申出に對し、先生の希望に因つて二十人ばかりの書生を容るゝ家を建てる事になつたのである。其普請が落成すると同時に先生は書生と一緒に大塚から引移られた。其れが即ち謙和舎である。

其頃まで巖本善治氏は能く人に先生を紹介したり、學生を先生の處へ行くやうに勧めたりしてゐたのである。或時巖本氏は押川、海老名、内村其他當時基督教徒中の首腦者達を先生と共に自宅に招いて晚餐會を催した事がある。それは先生を之等知名の人々に紹介するためであると、巖本氏は私に談した。併し後に其晩の様子を聞くと、新井先生は極めて謙遜な態度で饒舌家ではないためか、折角の會合も不徹底で無意味に終つたやうである。

謙和舎は東福寺の所有地を周圍の畑とも二千坪ばかり借りて其の中に建てたのであ

る。最初は同志の中で最も農事に趣味あり経験ある某氏を主任者と定め、他の者は皆其指圖に従つて相當の手傳をする、手の回らぬ時は臨時に日雇を頼んで周囲の畑を耕し、其收穫を以て地代を拂ふと云ふ計畫であつた。併し書生流の百姓で地代どころではない、結局肥料代さへ取り上げる事も出来なかつた。更に方法を變へ、各々受持の區劃を定めて耕作の分擔をして見た。けれども結果は前と違いが無かつた。

其の中に段々地代は滞る、坊主からは厳しく催促を受ける、會計は何時も随分困難であつた。それでも年二回の決算期には不思議に諸方から二三百圓位の金高が集まつて、どうにかこうにか十年以上も維持して來たのは寧ろ驚かざるを得ないことであつた。しかも先生は曾て一度でも人に對して苟くも寄附を求むるなどと云ふやうな事は絶対に爲さるなかつたのみならず、某の處へは必ず金錢問題を持ち込んでならないとか、某には必ず地代の話を持ち出してはならないとか言はれて、却つて門下を厳しく制肘された程であつた。其後追々地代は高くなる、寺へ對する滞りは中々減らないばかりか、かなりの金高に層んだ。こんな事を先生の耳に入れて詰らぬ俗事に先生の

心を煩はしては濟まないと云つて、皆で可なり苦心したが、とう／＼此不始末が先生に解つて了つた。遂に止むを得ず、謙和舎周囲の畑を人に又貸しすると云ふ話を持ち出して、先生に同意を請ふたのである。先生は近所に人の家が建つて段々窮窟になるのを餘程不愉快に思はれるやうであつたが、詰り縁故のある人に限ると云ふ條件付で承諾をされたのである。併し又貸しと云つても、こちらが寺から借りて居るより一錢一厘も高く貸すと云ふ譯ではない、唯寺へ支拂ふ比較的安い地代を分擔して貰ふと云ふだけの事である。さう決定すると忽の中に縁故の淺深は兎に角、謙和舎の周圍には大抵明き地の無い程に家が建てられた。其後は先生御自身も毎月小遣を割いて地代の分擔をなされたのである。長い間困らせられた地代問題もやつと解決が出来るやうになつて、寺へ對し少しの不義理も残されなかつた。

話は地代のことにはかり奔つてしまつたが、曾て會計を預かつて居たS氏が私の處へ來て

『謙和舎の周圍を人に貸すと云ふ事は先生がお嫌ひになるし、このまゝでは逆もやり



切れるものではなし、どうしたものだらう』  
と云ふのである。私は

『斷然謙和舎に屬する建物全部を賣り拂つては如何、さうすれば多分建た時の三分の一位の金高には替へられやう、それを以て中野邊の郊外に適當な土地を買入れ、其處へ先生のお住居として一軒の小札張りとした家を新築する事が出来やう、而して其處に時々小集會を催しても差支へない位の客間さへ在つたならばそれで事足る譯であらう、それが一番得策ではないか』

と自分が従前からの持説を繰り返して答へた。S氏も

『それが出来れば良いだらう』

と言つて略ぼ同意して歸つて行つた。而してS氏は翌日あたり先生に其談をしたものと見える。二三日の後私が例の如く先生の處へ行くと、先生は早速

『斯う云ふ物があります』

と言つて一札の書附を出して見せられた。それは謙和舎を建築した時に平沼延次郎氏

から先生へ宛て差し出して置たものである。文意は

『此家は基督に献げたものである故に何人も自由にするを得ず』

と云ふものであつた。之に因つて私がS氏と相談した一件は詰り行ふべからざる事である。と云ふ譯を示されたものと思つた。

或時に先生はまた

『或人が私のために氣候の良い海邊に家を建てやるから今後は其處で靜に老を養つたらよからうと言つて呉れますが其れは斷りました。自分の徳に相當する以上の物は受けません。此處は私の事務所です、此處から又何處か他へ引越して行つたら私に用があつて尋ねて来る者のためには迷惑でせう』  
と云ふ談をされることがあつた。

而して大正十一年六月十六日に先生は七十七の高齡を以て他界へ逝かれるまで實に二十年の間謙和舎を家とし、舎生を家族として、終始一貫貴き十字架の生活を營まれたのである。

此處で先生は彼の不朽なるべき多くの大文章を書かれたのである。其大部分は印刷に附して同志の友に與へられたのである。中には特に印刷に附するなかれと嚴命されたものもあるし、亦手寫することさへ許されなかつたものもある。

此處で先生は常に親近の門下を接見して、時には共に酌み、共に食しつゝ、而も極めて靜かに、清興湧くが如く談論盡きざることもあり、時には激勵叱咤、天賦の權威を以て他の靈性を呼び起さんとされたこともあり、機に従つて指導訓戒、懇切至らざるなく、身は病床に横たはり、口もの言ふ能はざるに至るまで、孜々として教へて倦まれなかつたのである。

此處で晩年は特に毎日の如く音づれ来る遠近の訪客に對し其煩をも厭はれず必ず自ら出て應接されたのである。中には唯一度來たばかりで豫想に反する耄碌爺と思ふてか、二度と再び來ない者もあり、或は二三度來て之れ非常識な頑固老人に過ぎずと爲してか、其れきりになつて了ふ者もあり、幾度か相見ても相當に諒解が出來たものと思つて居れば、畢竟之れ唯温良なる好々爺のみと、一言軽く評し去つて又省みない者

もあり、數年在舍の學生でさへ、一度去つては絶えて音信だに無い者も少くないと聞いてゐた。併しながら先生は或時

『此土地も善い事のために用を足しました』

と、平生の感慨無量なるに似ず、積年勞苦の効果多少見るべきものあるを思ふて、稍稍満足さるゝ如き言を漏らされたことがある。

以上は私が初めて先生と相見えて以來二十餘年間の記憶を概略述べて記したものに過ぎない。先生の傳記は他日必ず適當なる人によつて書かれるであらう。

### 奥遂先生を思慕して

足一步謙和舎の門へ這入ると既に全く俗世間とは違つた別天地の感じがしたものである。従つて自然に氣分が緊張して今更の如く自己の醜さが反省される。何時も相變らず斯んな状態では實に先生に對して濟まないと思はないことはなかつた。

謙和舎が建てられた頃はアノ邊一面廣々した畑で、只處々に農家や牛舎が散在して

見ゆる位の至つて静な郊外の趣があつた。其後年々に新しく家は出来る、電車は通ずると云ふ有様で今は附近に畑など何處にも見られない。市と接続した立派な町に成つて了つた。

周囲は此の如く二十年前とはすつかり違つて了ひ、謙和舎の庭に植えられた樹木も何時の間にか驚かれる程に伸びて、往來からはアノ高い建物の屋根も見えないやうに成つた。

門を這入つて生い茂れる木立ちの間を通つて、二十年來先生が起臥する、謙和舎の入口に立つ時は俗に所謂敷居が高いと云ふ感じをするのが私の常であつた。だが躊躇しても居られないから戸を開けて玄關へ入ると別に召使が居る譯でないから何時も先生がドアを開いて横の部屋から出て見えた。大抵は無言で、親しい者に對しては別に上れとも何んとも言はれなされた。黙禮して上つて行くと先生は室の一隅から坐蒲團を持つて來て火爐の側に坐を與えられる、更に一禮して席に着くと先生は起つて別室に入つて酒や有合せの菓物や鐘詰など何かと取り出して來て馳走の用意をなされる、

何時も誰に對しても斯う云ふ風で接對は此上ない慇懃なものであるが亦極めて静肅なものであつた。やがて先生自ら爛の加減を試みられてから酌んで下さるまゝに幾杯かを傾ける、其間に自然色々なる談が出る、時事に對する卓越した評論を聴くことを得たのも斯う云ふ折である。それは必ず通常の世論より遙に高く、而して極めて事情に適切なものであつた。學者の迂論とか政治家の俗見とか云ふものゝ類ではなかつた。或は亦友人達の安否や其家庭の消息までも能く噂に出た。けれども無論餘計な無駄談と云ふ種類ではない、先生が常に諸友を見ることが全然一家の者の如くであつたからである。

先生は晩年こそ段々に外出もなされないやうに成つたが、前には能く散歩がてらに友人達の家へも出懸けられたものである。私の家へも幾度か尋ねて來て下さつた。其時は何時も緩つくり休んで晚餐を共にされた。偶々先生が吾々の家へ來られる事はどれ程吾々の力に成つたものか解らない位である。先生が來られると暫くの間は家の中が神聖にされたかの如き感じがしたものである。之は無論私ばかりの感じではない。

或友人は「先生が来て下さると一週間位は家の中の空気が違つたやうになる」と言つて居た。之は恐らく門下の友人達が皆一様に持つてゐた感じであらう。

先生は近所に住む者の處ばかりでなく、態々房州に居る者を訪問のために出懸けられた事もある。曾ては遠く秋田、函館、室蘭、小樽までも行かれた事がある。亦一と夏は元門下に在つた者の請に任せて新潟まで行つて其家に滞在された事もあつた。今から七八年前に私の友人で中野に住む者の懇望によつて一度其家まで私が御伴をして御案内した事がある。私の知つてゐるのでは先生が外出されたのは其れが最後であつた。

其後私は湘南の山村に雨露を凌ぐばかりの草廬を作り、此處を此世に於ける靈戰の根據とし、天下の惡勢に拮抗する城郭と爲す積りであつた。それ故一度先生に来て置いて頂きたいと思つた。而してそれを御願したが、残念な事にはもう先生の老體は私の希望を叶はせるに無理であつた。

先生享年七十七、天命に因つて遂に此地を去り他界へ逝かれ、今や彼界に在つて更

に非常なる英氣を以て新なる學に進みつゝ、愈々貴き生活を營まるゝであらう。吾等地上に残る幼學の徒は、免れ難き責任の限りなく重且大なるを痛感せざるを得ない。

### ハリス先生

新井先生が在米三十年の間親く師父として事へ従ひ學ばれた人はトーマス・レーク・ハリスと云ふ人である。併し新井先生は平生無意味なる雜談や徒に他の噂などは決して爲された事はなかつた。故に吾々が何かにつけてハリス先生の事をお尋ねすれば或は極く簡単な答へが無かつた譯ではないが、先生の方から曾てハリス先生の事に付て談し出された例しは一度も無かつた。吾々は新井先生が在米中の事を成るべく詳しく知りたかつたのであるが、餘計な事を言ひ出して又何んど叱られるかも知れないので、誰も詳しいことを訊いた者はなかつた。

兎に角ハリス先生と云ふ人は非常なる天命を蒙つた非凡の人であつたに相違ない。だが斯う云ふ人の常として亞米利加に於ては餘り人に知られなかつたと云ふことであ

る。偶々牧士などが訪問して来る事もあつたさうであるが、さう云ふ人達に對する應接は如何にも峻烈なもので、さすがの新井先生でさへ恐ろしくて傍には居られない程であつたと云ふ。

ハリス先生の著書は澤山ある。而して其大部分は韻文である。大抵ロンドンとグラスゴウの書肆で出版したものである。亞米利加で出たものもあるが、其れは却つて僅少である。歐羅巴から來てゐた門人の中には善い人も在つたと云ふことである。それで英國の方に出版の便宜が在つたものと見える。其れは何れも頗る珍重すべき貴い書物であるが歐米を通じて之あるを知る者さへ極めて少數に限られてゐるやうである。

新井先生が日本へ歸られてから猶數年後までハリス先生は餘程高齡で健在して居られたやうであるが、新井先生との間に絶えて交通は無かつたやうである。それは吾々からは不思議のやうに思はれた。けれども新井先生は曾て

『人は相互に能く一體と成つて居れば交通などの要はないものであります、平生は何處に在つても各々神に事へ其分を盡して居るものと信じて互に全く安心して居るし、

若し何か一方に變事が起れば何程離れて居ても直に精神を以て感應する事が出来るもののです』

と言はれたことがある。

ハリス先生の傳はグラスゴウで出版されたものがある。

猶横井小楠先生が當時在米の二姪に宛てたる書翰中の一節を左に摘録する。

薩州生鮫島誠藏森金之允外國にては野田忠平深井鐵太と改名四年前イギリスに參り居候内同國人ヲリハントと云者に出會ヲリハントより咄聞候には世界人情唯々利害の慾心に落入り一切天然の良心を消亡致し有名なる國程此大弊甚しく有之候必竟は耶蘇の教其道を失し利害上にて諭し候故に人道滅却嘆けはしき事なり我等も全く耶蘇に落入居候處アメリカ國エルハリスと云人より初て人道を承り悔悟いたし候此エルハリスも元は耶蘇教の教師にて有之二十四歳にて天然の良心を合點致し候人倫の根本此に有之事を眞知し是より自家修養良心培養に必死にさしはまり誠に非常の人物當時世界に比類無之大賢人なり此人世界人道の滅却を嘆き専ら當時の耶蘇の邪教

を聞き候志なりヲリハント再び云我は役事相斷（下院の長を勤たりし由）エルハリスに隨從し修行せんと欲すとの咄し有之薩の兩人も甚驚き遂にヲリハントと共にアメリカに渡りエルハリスに従學せりエルハリスは退隱村居門人三十人餘有之相共に耕して講學せり其教たるや書を讀むを主とせず講論を貴ばず専ら良心を磨き私心を去る實行を主とし日夜修行間斷無之譬は靄然たる春風の室に入りたるの心地せり然しながら私心を挾む人は一日も堪へがたく偶々慕ひ來りし人も日ならず歸り去る者のみにて遂に其堂を窺ふこと不能薩の兩人も初は仲々堪がたかりしが僅に接續の力を得て本來心術の學問に入りたり此人云世界總て邪教に落入り利害の私心に渾化せん實に人道の滅却なり未だ邪教の入らざる處は日本とアフリカ内何と云國のみなり日本は頼みある國なれば此盡力は十分に致したきものと薩人近頃歸り兩三度參り此道の咄し合面白く大に根本上に心懸け非常の力行驚き入たり此エルハリスの見識耶蘇の本意は良心を磨き人倫を明にするに在り然るに後世此教を誤り如此利害教と成り行き耶蘇の本意とは雲泥天地の相違と云ふ事なり

此段大略申遣候扱々感心の人物不及ながら拙者存念と符節を合せたり然し道の入處等は大に相違すれども良心を磨き人倫を明にするの本意に至りて何の異論かあらん實に此の利慾世界に頼むべきは此人物一人と存するなり都合に因りては必ず尋ね訪ひ可被申重々存候事 云々

大正三十一年十一月十日印刷  
大正三十一年十一月三日發行

不許複製

(定價金壹圓五拾錢)

著者 永島忠重

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地  
福永文之助

印刷者 東京市京橋區南紺屋町四番地  
福神和三

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地  
警醒社書店  
振替東京五五三番

春風早既に温にして清し、是に於て戶外又野草を思ふ。我れ野草を思ふ、野草も亦思ふありや。天之に衣するに清衣を以てす、天夫れ草を思ふ、草豈天を戴かざらんや。識らず思はず天の則に従ふは草なり。無感に感じて天愛に應ず。微妙の靈亦其中に在り。草に非ず其中に住む我が小弟妹なり。其長するに及んでや、或は我に先ちて昇らんも亦未だ知るべからず。後なるものゝ先となること實に多し。皆父母神の御旨のまゝならんを願ふ。

「静間讀」の一節

別所梅之助著	武藏野の一角に立ちて	定價二圓五十錢 送料十九錢
内村鑑三著 畔上賢造著	平民詩人	定價一圓三十錢 送料八錢
田中龍夫著	天地生き活く	定價一圓二十錢 送料十錢
徳富健次郎著	順禮紀行	定價一圓八十錢 送料十二錢
山中峯太郎著	我れ爾を救ふ	定價一圓九十錢 送料八錢
リシャル周明著 大川周明著	永遠の智慧	定價一圓五十錢 送料十二錢
エリオット著 今泉浦治郎譯註	サイラス・マアナ	定價二圓五十錢 送料十七錢
畔上賢造著	宗教詩人 としてのブラウニング	定價一圓八十錢 送料十七錢

東京 京橋 警 醒 社 書 店 振五 替五 東三 京番



285

104

終

